

波瀾万丈の大正・昭和初期

米作実収高と農民生活



▲▲ 農民の暮らし(昭和13年 1938 頃)

村名	伊庭		能登川		五峰		八幡		栗見		栗見荘		
	明43	昭5	明43	昭5	明43	昭5	明43	昭5	明43	昭5	明43	昭5	
農家数	126	138	107	97	232	165	747	815	340	354	205	231	
自作	23	35	37	17	85	49	239	240	60	67	87	74	
自小作	80	77	46	51	70	64	348	454	196	261	100	123	
小作	23	26	24	29	77	52	160	121	84	26	18	34	
昭和元年	作付面積	133.1町		84.8町		186.1町		475.6町		264.0町		125.3町	
	実収高	3,200石		2,403石		4,930石		11,420石		6,284石		2,601石	
	反当収穫高	2石4斗		2石8斗3升		2石6斗5升		2石4斗		2石8斗		2石8斗	

(1町 = 1ha、1石 = 180kg)

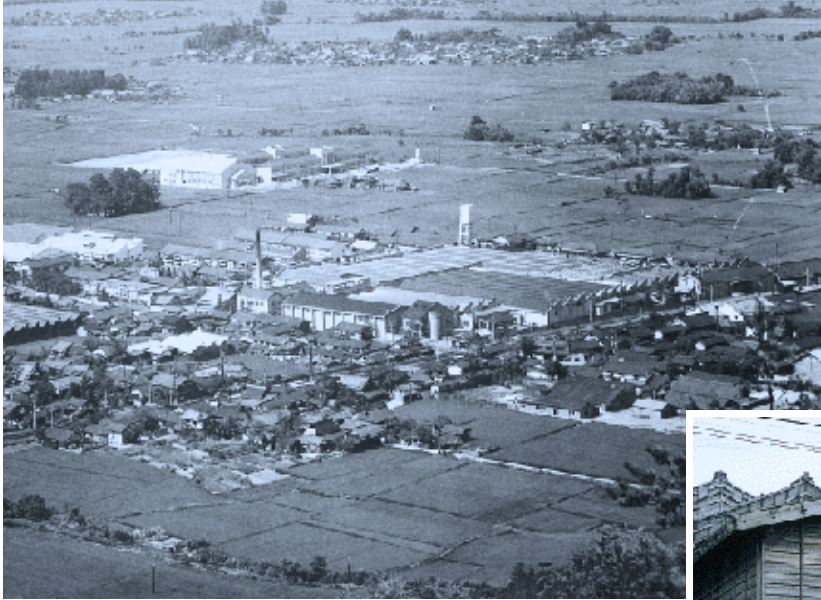
自作農は全農家の20～30%で、自小作農および小作農が70～80%を占めています。
 所有規模は1戸当たり5反(反 = 10a)未満が60%で、1町以上を所有する農家は20%位で、3町以上所有し、ほとんど小作農に頼っていた地主が約60戸ありました。なかには10町以上所有の不在地主もいました。
 小作料は小作田評価により差異はありましたが、反当たり約1.2石(石 = 180kg)でした。
 豊作年は反当たり約3石、不作年は2石の収穫高で、小作農にとって年貢納入は厳しいものであったと言われ

ています。
 肥料にはニシン、白子、油かす、藻などが用いられました。
 年により豊凶の差がかなり見られ、凶年は明治40年(1907)、大正7年(1918)、10年、12年、昭和10年(1935)、28年でした。
 麦、菜種などの裏作も多くの農家でなされましたが、明治43年の統計によりますと、上記6カ村で1000戸が養蚕業を副業としていました。

工業の発達と商店等への奉公

近江麻布主産地として、明治44年(1911)工業試験所が設置されました。大正7年(1918)近江蚊帳(株)が、翌年には日本カタン系(株)(戦後日清紡と改称)が設立され、各地に中小の織物会社が創業しました。その下請けとして多くの農家では機織りをして稼ぐ家庭もありました。

一方、当地から近江商人(とくに繊維問屋が多い)は、京阪神や東京・九州・北海道までも商域を伸ばしていました。その商家へ男子は丁稚として、女子は女中として奉公する人も数多く見られました。大正13年の調査によりますと、当地域出身の著名な近江商人は82名を数えています。



◀日清紡(昭和30年 1955 頃)



▲北海道江差町「中村家(今出身 旧大橋家)」

不景気と満州事変・日中戦争

大正12年(1923)の関東大震災をきっかけに国内は景気が悪くなり、ついに昭和2年(1927)には金融恐慌となっていました。当然、当地域においても不景気の波は繊維業界を始め、中小商工業にまで押し寄せ、倒産・失業が相次ぎ、庶民の暮らしにも多大な影響を与えました。これらの大恐慌を乗り切るために中国侵略がくわでたられ、満州事変・日中戦争へと発展していきました。



出征兵士の家